

論 文 要 旨

双極性障害の再発に及ぼす Perceived Criticism

および非機能的態度の影響

平成 29 年度

北海道医療大学大学院心理科学研究科
臨床心理学専攻

成 瀬 麻 夕

本論文の目的は、双極性障害の症状に Perceived Criticism および非機能的態度が与える影響を検討することである。

第1章では、双極性障害と Perceived Criticism (PC) と非機能的態度に関する先行研究を概観した。双極性障害は、極端な気分の落ち込みと高揚が繰り返され、社会機能が障害される精神疾患である。双極性障害は再発率が高いため、気分の安定化が主な治療目標である。PC とは、ある人が認識している、ある人とその重要な他者（家族、恋人、親しい友人など）との関係性の中で生じている批判の認識とその批判の認識に伴う動揺の程度を指す。また、非機能的態度とは、Dysfunctional Attitude Scale (DAS; Weissman, 1979) を用いて測定する、達成動機 (e.g. なんでも完璧にしなければならない)、自己コントロール (e.g. 自分の感情や行動はコントロールできなければならない)、他者依存性 (e.g. 他者に愛されなければならない) という3つの機能的ではない考え方や振る舞いを指す。PC と非機能的態度はともに双極性障害の抑うつ症状および躁症状と密接に関係すると考えられる。一方、(1) PC の評価項目である Perceived Criticism Measure (PCM; Hooley & Teasdale, 1989) の日本語版を作成する必要があること、(2) PC が双極性障害に特徴的な心理社会的要因であるかを確認する必要があること、(3) PC および非機能的態度と双極性障害の症状（抑うつ症状、躁症状、生活機能の障害）がどのように関連するか、PC および非機能的態度が長期的に双極性障害の症状（抑うつ症状、躁症状）にどのように影響するかを明らかにする必要があること、という3つの問題点を挙げ、それらを解決することを本論文の目的とした。

第2章（研究1）では、回答者とその重要な他者との間にある批判の認識を測定する PCM の日本語版を作成し、その信頼性と妥当性を検証した。PCM は4項目で構成され、項目1は重要な他者に対する批判の程度、項目2は重要な他者から受ける批判の認識の程度、項目3は重要な他者から批判を受けると認識することによる動揺の程度、項目4は重要な他者を批判した際の重要な他者の動揺の程度をそれぞれ評価する。研究1によって PCM が日本で使用できることが示されたことで、双極性障害患者の家族に対する批判を介した認識を測定することが可能となった。

第3章（研究2）では、PC が双極性障害に特徴的であるかを検討するため、双極性障害患者と健常者の PC を測定し、その差を検討した。その結果、双極性障害患者の PCM の各項目の得点は健常者と比較して有意に高く、特に、項目2および項目3が双極性障害に特徴であることが示された。さらに、多重ロジスティック回帰分析の結果、PCM の項目2および項目3の得点の高さは、有意に双極性障害の診断と関連していることが示され、PC は双極性障害に特徴的な心理社会的要因であることを示唆した。

第4章（研究3）の横断調査では、双極性障害の PC と非機能的態度が、抑うつ症状、躁症状および機能障害とどのように関連があるかを検討し、PCM の項目2の得点が高い者ほど完璧主義的傾向（DAS-24 の達成動機）が強く、症状をコントロールしなければ（DAS-24 の自己コントロール）という態度が強い者ほど躁症状が強いことが示された。また、PCM の項目1、項目2および項目3の得点が高い者ほど躁症状が強いことが示された。また PCM

の項目 1 および項目 2 の得点が高い者ほど機能障害が強いことが示された。また抑うつ症状の強さと機能障害の強さは正の相関関係を示しており、PC、非機能的態度と双極性障害の抑うつ症状、躁症状および機能障害と横断的な関係性があり、臨床的に想定されてきた患者の非機能的態度と、患者が認識する家族の批判的態度の悪循環が実証された。

さらに、縦断調査では、双極性障害の PC と非機能的態度が 6 か月後の抑うつ症状、躁症状および機能障害とどのように影響しているかについて検討した。その結果、ある時点での、PCM の項目 3 および項目 4 の得点が高い者は、その時点で機能障害が生じていなくても、6 か月後の抑うつ症状が増悪することが示された。したがって、ある時点では、抑うつ症状、躁症状および機能障害のどの側面においても寛解状態の者であっても、重要な他者から批判されたという認識によって動揺し、重要な他者に対して批判をした際にその重要な他者の動揺を強く認識するという特徴を持つ者は 6 か月後の予後が悪化することを示唆した。

第 5 章では、本論文で得られた研究結果について考察し、双極性障害の PC と非機能的態度に焦点を当てた研究における本論文の意義を述べた。具体的には、受診初期の段階で双極性障害患者の PC に注目し、症状が重症化しないうちに重要な他者との関係性について支援を行うことが必要であることを提言した。また本論文の限界と課題として、(1) PCM の詳細な整備が必要なこと、(2) PC と非機能的態度の関係の方向性を再検討すること、(3) PC を臨床応用する際の心理教育ツールの作成が必要であることという 3 点を挙げた。